

「ヨシュア：見方・受け止め方が変わります」

私達の教会では毎週、日曜日、「人生の危機管理」というテーマでメッセージをお話しています。人生には色々な危機がおとずれます。その危機には不意に私達に襲いかかってくる天災や事故のようなものがあり、また自らの言動や決断によって向き合わなければならない危機があります。私達がこのシリーズで向き合っているのはこの後者で、このような失敗をした聖書中の人間について注目しています。彼らの失敗から私たちが知恵を得、彼らと同じ過ちを犯すことがないようにと祈り、願いつつ毎週、このメッセージを語らせていただいております。

しかしながら、誰かの失敗とか危機というものばかりを見ていますと、確かに物事に対する注意深さとか緊張感を得ることはできるのですが、どうしてもそれだけでは心が委縮してしまいます。そこでこのシリーズの中に失敗だけではなく、人が成した堅実な信仰の歩みというものもこれから時々、織り交ぜたいと願っております。今日はその一人、ヨシュアという人に注目しましょう。

私達はエジプトに奴隷となっていた数百万ものイスラエルの民を率いて、エジプトを出て荒野での旅路についたモーセについて学びました。そのモーセも不死身ではありませんから、そのはたらきを継ぐ者について考えなければならない時がきました。

モーセによってエジプトを出てきたイスラエルの民達が神様から示されて向かうべき最終の目的地はカナンでした。しかし、その最大の功労者であるモーセはその目標を見ることができずに神のもとに帰らなければなりませんでした。そこで、いよいよ主はモーセに言われたのです「神の霊のやどっているヌンの子ヨシュアを選び、あなたの手をその上におき・・・なさい」（民数記27章18節）。モーセには子供がいましたが、モーセの偉かったことは彼らを自分の後継者とはせずに、神の示されたヨシュアを選び、彼にイスラエルの先頭を立つために必要なことを教え示したのです。このことがうまくいかないと私達は混乱し、後々、骨肉の争いとなることがあります。

このモーセとヨシュアの世代交代から私達一人一人は神様から与えられた一つの時代にしか生きることができない者であるということを確認します。すなわち私達は先代の人達が築いたものを引き継ぎ、そして、それに私達の成し遂げる最善のものをつけ加え、次の世代に引き継いでいく役割を負っているということです。

ダビデはイスラエルの王として、エルサレムの神殿建築を望んでいましたが、それを成し遂げたのは彼の息子のソロモンでした。預言者エリヤのはたらきは、さらに霊的な力が神様から与えられたその弟子、エリシャに引き継げられました。バプテスマのヨハネはイエス様がその活動を始める前に後に続くイエス・キリストのために道を整えました。

ヨハネキリストを指して「彼は栄え、私は衰える」という立場に生き、イエス様と入れ替わるかのようにして天にかえりました。

私達が何かを習得しようとする時、すぐにそのことに熟練することはできません。そこにいたるまでには年月が必要であり、そのために見習いというような時を過ごすことがあります。営業職であっても、宮大工であっても、寿司職人であっても、まずは上司とか親方と呼ばれる人のもとで手習いを受けて、やがて一人立ちしていくものです。

同じようにヨシュアもまずイスラエルのリーダーであるモーセの側に仕える若者として聖書の中に出てきます。その間、モーセの言動をつぶさに観察し、その働きを間近に見ながら実際のリーダーとしてのあり方を心に刻みました。その経験の中に彼にとっては忘れられないある出来事がありました。それはイスラエルがモーセの指揮のもと、宿敵アマレク人と戦った時にヨシュアが見た光景でした。出エジプト記17章9節－16節に記されています。

9 モーセはヨシュアに言った「われわれのために人を選び、出てアマレクと戦いなさい。わたしは明日、神のつえを手にとって、丘の頂に立つであろう」。10 ヨシュアはモーセが彼に言ったようにし、アマレクと戦った。モーセとアロンおよびホルは丘の頂に登った。11 モーセが手を上げているとイスラエルは勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。12 しかしモーセの手が重くなったので、アロンとホルが石を取って、モーセの足もとに置くと、彼はその上に座した。そしてひとりはこちらに、ひとりはあちらにいて、モーセの手をささえたので、彼の手は日没までさがらなかった。13 ヨシュアは、つるぎにかけてアマレクとその民を打ち敗った。14 主はモーセに言われた、「これを書物にしるして記念とし、それをヨシュアの耳に入れなさい。わたしは天が下からアマレクの記憶を完全に消し去るであろう」。15 モーセは一つの祭壇を築いてその名を「主はわが旗」と呼んだ。16 そしてモーセは言った、「主の旗にむかって手を上げる、主は世々アマレクと戦われる」。

その時、イスラエルはアマレク人と戦いの最中にありました。モーセはそのためにヨシュアに、アマレクとの戦いに出るようにと命じるのです。そうです、モーセはヨシュアに後継者としての経験をさせたのでしょう。ヨシュアは言われた通りに戦いに出て行きました。彼は軍人ですから、戦い方というものを知っていたと思います。綿密な戦略をたて、日ごろから訓練した者達と共に戦いに臨んだことなのでしょう。そして、その戦いに勝利をとりました。その実際の戦いはモーセ不在でなされましたから、自分達もまんざらではないというような思いをもっていただかもしれません。

しかし、意気揚々と自陣に帰ってみると、もしくは後日、ヨシュアが戦っている間にモーセが手を挙げて神様に祈っていたということ、すなわちモーセがその祈りの手を挙げていた時にはイスラエルが勝ち、手を下げるとアマレクが勝ったということを知るの

す。ゆえにその戦の勝利はヨシュアとその軍隊の力によるのではなくて、ひとえにモーセの祈りに応えた神様の力によるものであったということを彼は知るので。

皆さん、主はヨシュアを名指しして「これを書物に記して記念とし、それをヨシュアの耳に入れなさい」（14）とモーセに命じたのです。もしヨシュアがこの書物を読まなければ彼はその勝利は自分たちの綿密な戦略、自分たちの戦力、自分たちの戦意によるものであったと思いつけたかもしれません。そして、その思いがある限り、ヨシュアはモーセの後継者となることはできなかったのです。

このことは時に私達にも当てはまります。あれができた、この危機を脱した、その背後では誰かが自分のために祈り、ゆえに神が自分を助けてくださったのだということを知るときに私達は謙虚にさせられ、そして、主が共にある時に私は大丈夫なのだということを知るので。

こういうことをお話しすることは滅多にありませんが、メッセージにつながることでお話ししましょう。私達は水曜日、木曜日の集会で主に賛美し、証をし、聖書に学び、最後に祈ります。愚直なほどにこのパターンを変えずにきましたし、これからも変える予定はありません。私達はこれらの水曜、木曜集会、そして今朝も持ちました早天祈禱会で幾人かに分かれて祈ります。時にその祈りは教会の兄弟姉妹のことであり、家族のことであり、そして私達が会ったこともない人達のことであり、今朝もこの礼拝と今日一日の主の祝福と守りを祈りました。そう考えますと週の半分、私達は誰かのために祈っています。その時、私達は皆、モーセのように祈りの手を挙げて祈っているといってもいいと思います。そして、主はその祈りに応えてくださいます。ヨシュアがそうであったように、私達の病が癒されたりとか、抱えている問題が解決したとか、そのようなことがあるとしたら、それは決して私達の力だけによるのではなく、祈りの御手を挙げている者達のとりなしに主が応えてくださったのだと気がつき、主を見上げて歩むことはとても大切なことです。

この時にヨシュアは、戦の勝敗は戦術や兵士の力によるのではないということを知りました。勝利とは人の力によるのではなく、それは神から来るものなのだということを知りました。ヨシュアはモーセから大切な任務を引き継ぐにあたり受け取ったのです。そして、この経験は後のヨシュアの土台となります。神様はモーセの後継者であるヨシュアにこのことをまずしっかりと心に刻むことを望まれたのです。

詩篇20篇はイスラエルの二代目の王であったダビデによって書かれたものですが、それは王の出陣式に祭司が捧げた取り成しの祈りが原型となっていると言われています。その中に「ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。しかしわれらはわれらの神、主の御名を誇る」（7）という言葉が記録されています。ダビデも戦には長けている戦士で

す。しかし、彼も戦いの勝利は戦車や馬によるのではなく、神の御名にあるのだというのです。

私達にも寄り頼むものがそれぞれあります。強みとなるものといってもいいかもしれませんが。しかし、私達はそれらだけに寄り頼むのではなく、万軍の主のはたらきに委ねようではありませんか。もし、より頼んでいるもの、強みと思っているもの、これらのものが実はそんなものではなかったというようなことに気がつき始めている方がおりましたら、今がチャンスであります。取るべき道は一つ、そう、主と共に歩み始めることです。

ゼカリヤ4章6節には「これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」とありますが、まさしく私達が成そうとすることは私達の権力や勢いによるのではなく、神の力であるということを中心に刻もうではありませんか。

さて、ヨシュアです。神様はヨシュアがこのアマレクとの戦いで会得したことを実践すべく、その機会を彼に与えました。神様は私達が学んだことを、実践すべく、その機会を私達にもお与えになるお方です。私達にとって最高の学習方法は、習ったことをすぐに他者に教えることだと聞いたことがあります。私達は学んだことを実践することによって、それが私達の血となり、肉となります。

ヨシュアに与えられた機会はこのようなことでした。その時、イスラエルの全軍はカデシ・バルネアまで進んでいました。モーセは敵の状況を探らせようとして、ヨシュアとカレブを含んだ12人の偵察隊を敵地に遣わしました。彼らは帰ってきて、モーセにこのような報告をしました。まずはカレブとヨシュア以外の者達がいきました「28しかし、その地に住む民は強く、その町々は堅固で非常に大きく、わたしたちはそこにアナクの子孫がいるのを見ました。29 またネゲブの地には、アマレクびとが住み、山地にはヘテびと、エブスびと、アモリびとが住み、海べとヨルダンの岸べには、カナンびとが住んでいます」（民数記13章28節-29節）

それに対してヨシュアとその思いを共有するカレブはこのように報告しました。30 そのとき、カレブはモーセの前で、民をしずめて言った、「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」。

31 しかし、彼とともにのぼって行った人々は言った、「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」。32 そして彼らはその探った地のことを、イスラエルの人々に悪く言いふらして言った、「わたしたちが行き巡って探った地は、そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたち

が見た民はみな背の高い人々です。33わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリム（巨人）を見ました。わたしたちには自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」（民数記13章30節-33節）

二週間ほど前に私は少し鼻かぜをこじらせ、その後、長男、長女も同じような症状となりました。幸いフルーではありませんでしたが、このように風邪は人から人へと感染します。そして、私達が感染されるのは風邪ばかりではありません。不安とか恐れ、もっといいますと不満というものも人から人へと感染するものです。一人のつぶやきが幾千もの人達に感染することがあるのです。「ツイッター」というその名も「つぶやき」なるものがソーシャルメディアにあります。あそこでつぶやかれた不満は瞬く間に全世界に感染しうるものです。恐ろしい時代となりました。この時、ヨシュアとカレブを除く10人の者達が告げた報告を受けてイスラエルの民はどう反応したでしょうか。

1そこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。2またイスラエルの民はみなモーセとアロンにむかってつぶやき、全会衆は彼らに言った、「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。3なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか」。4彼らは互に言った、「わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」。（民数記1章1節-4節）

彼らの間には恐れが蔓延しました。彼らは冷静さを失い、かつての奴隷の身分に再び戻ろうと夜を泣き明かしたというのです。しかし、これらの恐れに対してヨシュアとカレブはこう言ったのです7「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。8もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。9ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食べ物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」（民数記14章7節-9節）。

その光景を見てきたある者達は言ったのです「その所は住む者を滅ぼす地で、そこには背の高い人々がおり、自分達はいなごのように無力な者に思われました。また彼らにしても私達が見たように見えたと違いありません」。しかし、全く同じ光景を見てきたヨシュアとカレブの報告は全く異なっており、彼らは言ったのです。「私達が行き巡って探った地は非常に良い地であり、それは乳と蜜の流れている地です。主が良しとされるならば、私達はその地に導かれ、主はそれを私達にくださるでしょう。それゆえに、大切なことは、主にそむいてはならず、主が私達と共におられるのですから、その地の民を恐れてはなりません」。

主にある皆さん、あなたはどちらの視点をもってこの世界を見ていますか。どちらの視点をもって自分自身を見ていますか。我が子を見ていますか。自分の将来を眺めていますか。この見方の違いが私達のかげがえのない人生を決定づけると思われませんか。

マザーテレサはかつてこう言いました「思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから」

皆さん、私達が生きる世界、その見聞きする光景を私達は互いに共有しています。そして、その光景をどう受け止めるかによって、私達の今日が、明日が変わってきます。私達の思考が私達の人生を決めると言われるように、ヨシュアの目にはとてつもない困難と思われるようなことが、またとないチャンスとして映ったのです。果たしてそのような思いはどこから来たのか、この違いはどこからきたのでしょうか。

それは先にお話ししたようにヨシュアがアマレクとの戦いの際に学んだことです。民は敵を見、そして自分を見て恐れしました。しかしヨシュアはその状況の中にヨシュアと共におられる神を通して敵を見たのです。そうです、その戦いは自分がどうであるとか、相手がどうであるとか、そういうことではなく、神が共にいる限り、大丈夫だということです。そして、このために大切なことは「主にそむいてはならない」（9）ことだとヨシュアは言いました。主はその御心なら必ずその地を我々にくださる、大切なことは主に従順に生きることだと言うのです。ヨシュアは確かにモーセからイスラエルのリーダーとして必要不可欠なものを引き継いだのです。

皆さん、私達が何かに直面する時に、そう、その時に私達はどれだけ神様について思いを寄せているのでしょうか。神様を抜きにしてその事を考えるのであるなら、私達はヨシュアと共に偵察に行ったスパイと同じです。彼らと同じように見聞きしてきた現実に心が奪われ、私達の気力は失われます。しかし、私達はそうではない、全知全能の神を信じている者です。そのような中でもはたらいておられる主の御手を信じる者です。それは自分では何もしないということではありません。自分のなすべきことを神に尋ね、そのなすべきことにまずは全力で取り組み、そして主のはたらきに期待することです。イエス・キリストはかつて私達の生きる秘訣について、こう言われたではありませんか。

1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2 わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。3 あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。4 わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながってなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながってなければ実を結ぶことができない。5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その

人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである（ヨハネ15章1節－5節）。

主イエスは何とも大胆に言われました。『枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない』（4）。『わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである』（5）。

ヨシュアがモーセの後継者となるために必ず会得しなければならなかったことは、このことだったのです。ヨシュアは主と共にあるゆえに、約束されていたカナンの地を得ることができると確信していました。それはヨシュアと共にある軍隊が強いということではなく、ひとえに神が我らと共にいるから我々は勝利を得ることができるという確信でした。同じように主は今、私達にも「私につながっていなさい。そうすればあなたは豊かな実を結ぶことができるのだ」と語りかけているのです。もう一度、私達が既に取りかかっていること、私達を取りかかろうとしていること、そこにこの主の存在を確認しませんか。お祈りしましょう。